カッコウ

浜崎淑子

一

和子が山岡と出会ったのは、横断歩道の中央に差し掛かった時だった。ざわめきの中に山岡はいた。前方より向かって来る山岡を一瞬、和子は捕えた。互いは視線の中に相手を留めたまま擦れ違い、まるで一本の糸の両端をそれぞれが引っ張っているかの様に、横断歩道の右の端と左の端の極限迄ピーンと張られた時、二人は立ち止まり相手を見詰めた。数十年前の記憶が甘美なものとして蘇り、やがて街の雑踏の中に吸い込まれて行った。暫く立ち尽くした和子は、込み上げて来る思いが相手を労るものに近い事を直感していた。

和子は数日前に、六十歳の誕生日を迎えたばかりだった。当然同級生だった山岡も同じ位の年齢になっている。最後に山岡と会ったのは、もう三十年以上前の事だから、互いの風貌もかなり変わっていて当然の事ではあるが、ただ今も健在なのが山岡のあの鋭い目つきだった。もう昔の事にはなるが、和子は山岡の物事を真正面から見据えて怯む事の無い強い視線、そうして時折見せる優しい眼差しが何の矛盾も無く共存している事に、異性でありながら微かなジェラシーを感じていた。

和子は、そんな山岡と二人してよく海を見に行った事を思い出していた。二つの自転車は先になったり後になったりしながら、青春という希望に満ちた幸せの中にいた。一時間位掛けて目的地に着くと、今度は自転車を転がし並んで海を眺めた。波頭に降り注ぐ太陽の粒子は、まるで銀色の蝶がヒラヒラ舞っているかの様に輝いていた。その時も山岡の目は遠くに向けられていた。和子はそういう山岡に、内に秘めた強い意志の様なものを感じていた。押し寄せて来る幾つもの波を乗り越え、やがて空と海との境界線の先に存在するであろう運命に自ら近づこうとしている。

もし和子が男なら、山岡から「今から異国の地に向かって、船を走らせようじゃな

いか」と誘われたとしても、即座に同意しただろう。たとえそれが無謀な計画であろうとも、どこか山岡には未知への可能性を感じさせるものがあった。

異国と言えば、その時も和子は山岡と港を歩いていた。ある貨物船の前を通り掛かろうとした時、船体に寄りかかり此方を見ている青年に出会った。青年は流暢な日本語で話し掛けて来た。

「こんにちは」

二十歳前後の陽に焼けた凛々しい顔が印象的だった。

「韓国の方ですか」

和子は船体に書かれたハングルの文字からそう返答した。

「はい、韓国から参りました」

「日本語がお上手ですね」

青年は嬉しそうに微笑みながら、

「上がりませんか」

そう答えた。

黙って聞いていた山岡は、躊躇する事無くタラップを駆け上がった。急ぎ和子は、山岡の後を追い掛けた。すると、青年は二人を彼の船室に案内してくれたのだった。そこには、机とベットが所狭しと置かれていた。和子は机の椅子に、山岡と青年はベットに腰掛けた。

「小さな宇宙みたいで居心地がいいなあ」

山岡が満足気に言った。

船室には小さな窓が有り、そこから見る世界は果てしなく広いものに思えた。それは、まるで望遠鏡から夜空を眺める様なロマンも感じさせた。

いつの間にか、和子はキャビンの円窓から見る星や月光が導く夜の世界を想像していた。青年、山岡そして和子が小船に乗り満天の星の下、北に向かっている。風に流されているのではない。櫂を握る手には、確かな手応えがあった。充実感に満たされた希望を全身で受け止めていた。人生の襞をこぎ分ける様に、櫂が立てる水飛沫が静寂の中に響いた。

どの位時間が経ったのだろう……。我に返った和子がふと机の上に目をやると、本立ての間にはぎっしりと書物が並べられていた。和子はその中にある雑誌のタイトル『太陽』という文字を見付けた。

「太陽……」

「どうかされましたか？」

「いえ。太陽という言葉には何か希望を感じますよね」

「そうですね」

「でも、随分いろいろと愛読されているのですね」

「はい。英語、フランス語、それからドイツ語も勉強しています。世界の事を知りたい。世界中の人と話をしてみたい、と考えています」

青年の言葉が清水に投げ込まれた小石の様に波紋を広げながら、ゆらゆら何処までも水中に向かって揺れている様な気がした。

その時、一人の中年男性が部屋に入ってきた。透かさず青年に厳しい口調で話した。青年のゆがんだ表情から私達の存在を指摘している事は察しがつく。

「じゃあ。僕達帰るよ」

山岡は片手を軽く上げ、二人は部屋を出た。来た道を引き返し、今度はタラップを駆け降りた。和子が後ろを振り向くと、青年はちょっと決まり悪そうにしながらも手を振っていた。山岡と和子は顔を見合わせた。青年、山岡そして和子と同じ時代を生きて居ると言う現実の中を清らかな風が通り過ぎて行った。あれからもう……。

気が付くと、和子は行き交う車の前に立って居た。目の前の風景は一変し、山岡の姿も無かった。和子は辺りを見回した。『カッコウ』のメロディーと共に、和子の傍に立っていた人達が歩道の方へ一斉に歩き出した。和子はその流れに逆らうかの様にその場に立ち尽くした。暫くして、和子は前方の信号機の天辺に一羽の鷲が止まっている事に気づいた。鷲はあの鋭い目で此方を見詰めていた。空をまるで我が物顔で羽ばたく翼を持ち、大地に縛られていない事への威厳を誇示しているかの様に思えた。思わず、和子は一歩鷲の方へ歩み寄った。すると、鷲はくるりと背を向け、そうして飛び立つ直前に此方を一度振り返り、悠々と翼を広げ空高く飛んで行った。和子は鷲がターコイズ・ブルーの空に小さな点となる迄見詰めた。

二

和子の一日は、カーテンの向こうの出来事から始まった。小鳥の囀りが朝の扉を開くと、遠くの方で列車がコトンコトンと動き始めるのが聞こえる。その音に紛れて救急車のサイレンが遠ざかって行く。和子はいつも床の中から、カーテンの向こうの光景に耳を傾けていた。

これが夜になると、眠りに着く迄の間、暗闇の中で天井に目を凝らす。昨今は、以前にはなかった感情が和子を支配する様になっていた。和子の体から和子の片鱗が一つ、また一つと暗闇の中に消えていくのが分かる。目を閉じれば、網膜に映る映像は、まるで富士山の八合目迄登り詰めた所で遠くの景色を見渡し、それから自分が歩いて来た足跡を確かめている様でもあった。鈴木和子。昭和二十五年生まれ。子供も手が離れ、ストーンショップで働き始めて十数年が経つ。

今朝もいつもと変わらぬ一日が過ぎようとしていた。そんな出勤前の和子の目に付いたのが、行き先の定まらない椅子だった。それは数日前より玄関に置かれていた。和子はそこに座り、磨りガラス越しに差し込んで来る朝の光をぼんやり眺めた。両開きの左右の戸はぴたりと閉ざされまま、中央で縦のガラス枠と横のガラス枠がまるで十字架の様に交差していた。何処からともなく吹く清々しい朝の風がすっと通り抜けた。

和子は靴を履き玄関を出た。和子の家は高台に建っていた。石垣の向こうは博多湾が一望出来ることもあり、夏は海から吹く風が快いのだが、冬は北風をまともに受ける為、風の強い日などは外に出る事すらためらった。

和子は家の前の坂を下り、樹木が生い茂る並木道を時々立ち止まりながら駅迄歩いた。木洩れ陽が葉っぱの縁を伝う水滴の様に輝き、熊蝉のシャーシャーと鳴く声が雨の様に降り注いでいた。朝のプラットホームでは、通勤客が列車を待っていた。やがて列車が着くとその人達は順番に乗車し、そうして車内が一杯になると同時に列車は街へと走り出した。車窓からは朝の澄んだ風景がパノラマ写真の様に流れている。周りを見回すと、神の審判を受ける信者の様に皆一応に沈黙を守っていた。和子は窓の

外に視線を移した。連なる家々の屋根に銀白色の光を重ねた部分が明るく反射していた。干したばかりの洗濯物が和子の気持ちを一瞬、幸せ色に染めた。列車はゆりかごの様に左右に揺れながら目的地へと向かった。列車が駅に着くと、今度は乗客達が一斉に雑踏の中へ走り出した。和子も人の流れに押し出される様に改札口を出ると、足早にバス停まで歩いた。バスの中では空気が一変し、あちこちで話し声が聞こえる。停留所に近づくと誰かが、ピンポンとチャイムを鳴らし、バスを降りる人、乗る人でざわめきが増して来た。バスの運転手さんは停留所に着く度に、

「ありがとうございました」

と一人々に礼を言う。和子は財布の中から小銭を集めそれを握り締めたまま、次の停留所で止まるのを待った。何かに『早く早く』と急かされている様だ。バスを降りた和子は勤め先に向かった。銀行の前を横切り、花屋の前を通り、角を曲がれば赤煉瓦の建物が見えて来た。シャッターが閉まっていたので、社長は未だ出勤していない様だ。店の前で社長の到着を待った。和子は昨日店長に昇格したばかりだった。とは言っても従業員二人の内、一人が昨日付けで辞めただけの事ではあるが、それでも和子にとっては前日にはないものを感じていた。いつも見慣れた店ではあるが、今日は鉄の看板にさえ重厚さを感じた。それはいつも通う道端で今迄気付かなかった何かを発見した様な、妙に新鮮な気持ちにさせた。和子はじっくりと看板の文字を目で追ってみた。

三

和子は夫と暮らしていた。夫の太郎も昭和二十五年生まれ。自動車販売会社の営業をしている。定年もそう先の話ではない。

そんな太郎と出かけたのは先週の事だった。太郎の車は、辛うじて車一台が入る細い路地を進んで行った。そうしてある民家の前迄来ると、樹木の脇に手際良く駐車した。『学生湯』という看板からどうやら銭湯らしい。和子は車から降り辺りを見回した。老朽化したアパートが目に付く。大学が近くに有る為、学生の住まいの様だ。和子は太郎に石けん、タオル、着替えを手渡し、二人別々に暖簾を潜った。入り口の番台にはおばさんが座っていて、二人分の入浴料を太郎が払った。脱衣場は昔ながらの

木造でおまけに脱衣籠も竹というのが和子にとっては嬉しかった。浴室の洗い場はシャワーでは無く、熱湯と水の両方の蛇口を捻り、程よい温度に調整する必要があった。普段の生活からすると少しばかり不便なこの有り様が、どこか郷愁を感じさせた。和子は浴場で身体を洗いながら、学生の頃に流行った歌を口ずさんでいた。

「二人で行った横丁の風呂屋……

いつも私が待たされた

洗い髪がしんまで冷えて

小さな石けんカタカタ鳴った……

若かったあの頃何も怖く無かった……」

〈今は何も怖く無いのだろうか。怖いものが有るのだろうか〉

和子は浴槽から天井を眺めた。天井のシミが、風化して来た時の流れを感じさせた。他にお客がいない事も有り、ライオンの口から注がれるお湯が浴室に響いた。タイル張りの図柄は富士山が定番だが、此処では一色のタイルの上に「イオン効果」という宣伝のポスターが張られていた。和子はこの頃身体のあちこちに老化を感じる様になっていた。一ヶ月前より一方の足が思うようにならないのもその一つだ。病院の診断は筋肉痛だったが、六十歳にもなると今までとは違う身体の変化を感じる。和子は湯船の中で脹ら脛を揉みながら、つい数週間前の出来事を思い出していた。

和子の足の治療を兼ねて、太郎と二人してとある湯治場に行った時の事だった。長時間の運転の疲れもあり、宿に着くと二人はタオルと着替えを抱え湯船に直行した。源泉掛け流しの湯は特別なもので、簡素な仕切りの向こうでも太郎が十分満足しているのが窺える。風呂から上がった二人は、他の場所のお湯も楽しもうという事で、久し振りに意見が一致した。カランコロンと下駄の音を鳴らしながら、小雨降る坂道を歩いた。ビニール傘の上では雨粒が踊っていた。

次に選んだのが蒸し風呂だった。和子は敷き詰められた蒸した石菖の上に寝転がり、低い天井の明かりを眺めていた。地下深くから伝って来るマグマの熱が、背中や腰や脹ら脛を通し体内に入って来ると、身体からは汗が滝の様に流れ出た。和子は目を閉じ、熱源のマグマが真っ赤に燃える様を想像した。暑さの余り身体がマグマに吸い寄せられている様な錯覚を覚える。しかも瞼の裏では、熱気が銀色の粒子になりキラキ

ラと蒸発していくのを感じた。『このまま私も蒸発してしまうのだろうか？』和子はそんな事を考えていた。暫くすると、暑さの余りこうしている事への限界を感じた和子は、蒸し風呂を出た。汗を拭きながら窓際に近寄り外の景色を眺めた。前方に咲く彼岸花の朱色が、巨木の連なる山間の霊気の中に溶けていた。耳を澄ませると、山の声が風の波となり山の彼方に遠退いて行った。

それから太郎と和子は宿に戻り、買っておいた弁当を広げて夕飯を取った。湯治場では自炊が原則なので、座っていれば食事が運ばれるのとは訳が違う。簡単な台所も備わっているので、六畳一間のつましい所帯の様相を呈してた。室内には白黒しか映らないのでは、と思わせるテレビ、綸子の着物を解いて縫い直した布が掛けられた鏡台などが置かれていた。二人は種類の違う弁当を時々交換しながら夕飯を取った。湯飲みに注ぐ音が妙に沈んだものに聞こえる。夜と向き合う時間が随分長く感じられもした。

食事も終え一段落していた時、太郎が突然、

「俺、眼鏡してたよな」

と言った。

「してたじゃない」

和子は答えた。

「何処においたかな？」

太郎を見ると確かに眼鏡は外している。

「最初に入った脱衣場じゃない。坂道を歩いて居る時も眼鏡してなかったもの。それに眼鏡を掛けて湯船に浸かったら、眼鏡が曇るから分かるでしょうから……」

和子はもはや眼鏡の所在地を確信しているかの様に、自信ありげに付け加えた。すると太郎は重い腰を上げ、眼鏡を探しに部屋を出た。暫くして戻って来た太郎の顔にはちゃんと眼鏡が掛かっていた。こういう会話は最近やたら多くなって来た。太郎にとっても和子にとっても同じ事が言えた。

浴場から出ると、番台でおばさんが新聞を読んでいた。今は懐かしい赤ん坊を寝かせる木の台が目に付いた。それは四方を縁取られたもので、赤ん坊が衣類やおむつを取り替えるのに十分なスペースだ。しかも、二三人は同時に使用出来そうだ。昔は子

供の数も多かったのでこの位の広さが必要だったのかもしれない。
和子は着替えなど入ったバックを肩に掛け、下駄箱から取り出した靴を履き外に出た。外では一足先に風呂を出た太郎が、夜空を眺めていた。和子は太郎に話し掛けた。
「男湯、誰かいた？」
「三人いたかな」
太郎が答えた。
「学生だった」
和子はもう一度尋ねた。
「いや、おじさんだったな」
太郎がタオルで頭を拭きながら答えた。それから太郎が言った。
「俺、絵を始めようと思っているんだ」
「油？」
「描く事は、別に油とは限らないだろう。」
もともと太郎は美術専攻だったが、畑違いの仕事に就いて今日に至っている。そう言う意味でも決して不自然な事ではないのだが。
「でも、どうして」
「自然の要求」
「自然の……」
「絵を描く事が出来なくなったら、生命が消えていく。そんな心境かな」
「生命が消えていく……」

四

今夜も夜空の果てから、いやもしかして和子の夢の中からだろうか。いずれにしても見知らぬ世界からやって来るであろう二人を和子は心待ちにしていた。
和子が二人の訪問客を最初に迎えたのは一ヶ月前の事だった。二人は玄関から入って来た訳でも無く、また窓から入って来たのでもない。強いてと言えば天井……。いや、やはり彼等は宇宙の彼方からやって来た訪問者に他ならなかった。
あれは風の強い夜だった。和子の小さな机は部屋の隅に置かれている。食事の後片

付けを終えた和子は机に向かい、雑誌のページをめくりながら、数日前の山岡と再会した時の横断歩道での不思議な出来事を思い出していた。いつの間にか、カッコーのメロディーが、窓の向こうで吹き荒れる風を縫うように近づいて来た。和子は目を閉じ耳を澄ました。

そんな時だった。和子一人しかいない部屋なのに誰かいる。和子は背後に人の気配を感じていた。和子は高鳴る心臓の鼓動を押さえようと息を殺した。振り向けば、とんでもないものが突っ立っている事は息遣いから推察出来る。和子は『時計が早周りして早く明日になればいい。』そんな事すら願った。和子はまず畳に目をやり、それから少しずつ後方に身体を回しながら目線を上の方に押し上げた。そこで和子が目にしたのは、到底理解出来ない現実に直面しているという事だった。目の前には二人のネイティブ・アメリカン。つまりインディアンが居た。そう、年の頃は五・六歳位の女の子と、和子位の年齢のおじさんだった。突然の訪問者に驚きというのは通り越して、何故か和子は笑い出してしまった。インディアン達も和子に合わせる様に笑った。和子は笑いながら、次にどういう行動をすればいいのか皆目分からないまま頭の中が真空状態になった。和子は勇気を出してインディアンの目を見た。その瞬間、それまで張り詰めていたものが一斉に崩れ落ち、和子はすっかり腰砕け状態になってしまった。『慈愛に満ちた眼差し』とはこういうものだろうか、和子はすっかり見入ってしまった。

それから、和子は片手を和子の耳の位置まで挙げた。それはインディアンに対する挨拶のつもりだった。女の子も同じ様に手を挙げた。和子は初対面のインディアン達に親しみすら感じた。灼熱の太陽の下、陽に焼けた小麦色の肌をした女の子の瞳は涼しげで、この世の多くを知っているかの様な賢さを感じた。その時、和子は思い掛けない行動に出た。和子は自分の掌を女の子の掌に近づけていた。一方、女の子は黙ったまま和子の様子を窺っていた。女の子の掌に刻まれた筋は、まだこれから伸びようとする木の枝の様にかわいい曲線を描いていた。それから、和子は二人の掌をくっつけてみた。大きさは随分違うが、汗ばんだ女の子の掌に触れながら、和子は女の子と何処か遠くで繋がっている様な気がした。和子はそのまま女の子の手を取り、女の子を自分の椅子に座らせた。インディアンの方は畳にあぐらをかいた。その時に気づいた事なのだが、インディアン達は皮の靴を履いたままだった。しなやかで柔らかそう

な皮の履き物はそれぞれに個性的だった。女の子の物はかわいい赤のリボンが、そしてインディアンの方には針装飾が施され、幾何学的な模様にはアートを感じた。

和子は何から話したらいいのか迷った。まず言葉が通じない。

（この人達、何処から入って来たのかしら……？）

和子は思った。

それに答えるかの様にインディアンは天井を見上げた。

和子も天井を見上げた。その瞬間、和子はあまりの驚きに声が出なかった。いつの間にか天井は紺碧の空に変わり、星が今にも溢れ落ちるかの様にキラキラ輝いていた。

（どうして……。どういう事……。信じられない……）

和子は感動をインディアンに伝えた。自分の部屋がまるでシンデレラの馬車の様に魔法に掛けられている現実に、戸惑いというよりもワクワクする様な幸せを感じた。

（あの……。私は和子。あなた方の名前は。何っておっしゃるの？）

和子は喜びの余り、自分の名前を伝えずにはおられなかった。

（私の名前はタタンガ・スニ。娘の名前はレインボー）

（レインボー……。へえー。素敵な名前）

和子とインディアンとは言葉を交わす訳ではなかったが、インディアンが持つ不思議な魔力のお陰で、和子の感情や考えは十分に伝わっていた様に思えた。

（でもどうして此処にきたのですか……）

（あなたに会いに）

（私に？　私に会いに……）

インディアンはそうだと頷いた。

和子もインディアンの前に座った。女の子は椅子に腰を掛けたまま、足を上下に動かしながら二人のやり取りを楽しそうに見ていた。和子は思った。例え見知らぬ人であろうと、見知らぬ所からやって来たにしても『会いに』という言葉には何故か嬉しさが伴う。やがて女の子も加わり、三人は車座になった。するとインディアンは自分の羽根飾りから羽を一本抜き取り、円の真ん中に置いた。それは知り合いになった事への儀式の様にも思えた。

暫くして、和子は見覚えのある大きな柱が、部屋の中に建っている事に気づいた。

（これもしかして、トーテムポールじゃないかしら？）

トーテムポールを包む、濃ゆい空気の層がゆっくりと沈んでいくのを感じた。
和子はその様子をじっと見詰めながら、
（あの柱の一番上に彫られているものは何かしら？）
思わず、呟いた。
（あれは、鷲だ）
（鷲……）
（そうだ。鷲だ。鷲は我等一族の守り神だ。そして、我等三人の誇りでもある）
（われら三人……。さ・ん・に・ん）
「あの……」
和子はインディアンに問い掛けたが、口をつぐんでしまった。
（この柱には我等祖先の思いが刻み込まれている。我等が何処から来たか。我等が大地に帰る迄、どれ程心豊かに生きて来たか。我等はこれから生まれて来るものの為に、我等の歴史をこうして伝えて来た）
和子はトーテムポールの方に耳を傾けた。古木の柱はホラ貝の奥から聞こえて来る話し声の様に反響し、やがてはトーテムポールの中に吸い込まれて行った。
気が付いた時には、すっかり聞き入っていた和子の腕を女の子が揺すっていた。和子は女の子の頭を撫でた。油分を含んだ艶やかな黒髪。和子の顔を覗き込む女の子の瞳が吸い込まれる様に透き通っていた事が、今でも思い出される。
今朝窓を開けた時も、風が通り過ぎるのを感じた。和子はあの二人が今夜もやって来る、と直感した。確かに和子の勘は当たっていた。ビューという口笛の様な風に吹かれ、二人が馬にまたがりやって来たのは、その日の夜の事だった。
（今晩は。まあ、久し振りですね）
和子の心も弾んだ。
（やあ）
馬から降りたインディアンはいつもの様に片手を挙げた。レインボーと言う名前を持つ女の子は、恥ずかしそうにインディアンの後ろから此方を覗いている。
馬は思いの外大きく、部屋のかなりの部分を占領した。インディアンが馬の首筋を優しく撫でてやると、馬は安心した様におとなしくなり、濡れた瞳を此方に向けていた。いつもの様に三人は車座になった。インディアンと女の子の体からは砂漠の砂の

匂いとなめし皮の匂いがした。三人は互いの再会を確かめるかの様に見詰め合った。それぞれは知り合ってからまだ日が浅いのだが、でもそんな事は問題ではなかった。三人が発するテレパシーが何かを超越した所で一つになれる様な気がした。ずっと昔何処かで出会った事が有る様な……。

和子が口火を切った。

（ここの所、雨が少ないので来られないのかな、と思っていました。別に関係はないでしょうが……）

（雨が少ない……。飲み水は有るのか）

インディアンが厳しい表情をした。

（人間は水がなければ生きてゆけない。我等は水を求め、どれだけ苦しい日々を送った事か。時には……）

（あの……。今のところ困っては……）

インディアンは立ち上がり、馬の方へ歩み寄ると馬の鞍から弓と矢を取り出した。何かが起こる。和子はインディアンの目を見てぎょっとした。インディアンの黒い瞳は鉛色に変わり、やがてコロナの様に燃えながら和子の視界を遮った。和子が気が付いた時、インディアンは矢を空に向けていた。弓のきしむ音、極限迄弓の弦が引かれた時、一瞬インディアンが鷲に見えた。たわめられた弓から放たれた矢はシューンという音を立て視界から消えていった。

その時だった。空は割れんばかりの激しい爆音と共に稲妻が走り、光のシャワーが放射線状に飛び散った。それと同時に狂乱状態になった馬は激しく暴れ出し、二本の後ろ足で部屋の壁を力一杯に蹴った。壁は一斉に崩れ落ちた。裂ける様な空を見上げながら和子は息を飲んだ。一方、インディアンは動じる事も無く馬の傍に近寄り、馬の耳を軽く叩き、それから馬の手綱を引きながら馬をその場に座らせた。すると馬はまるで金縛りになったかの様に温和しくなり、それでも首だけは高く持ち上げ定まらない二つの眼をきょろきょろと動かしていた。

やがて空からは透明な結晶が降ってきた。和子の頭上に、そして肩にと降ってきた。和子がそれらを両手の掌で受け止めた時、あっという間に溶けて水になり掌の中で揺れていた。目の前を通り過ぎた結晶は足元の畳に吸い込まれた。後から後から降り続く結晶は畳に吸い込まれた。

そうして、結晶が雨粒に変わった時だった。インディアンは慈しむ様に空を見上げ、いきなり踊り始めた。弓を片手で掲げ、もう一方の握り拳は何度も強く空に向けられた。それは天への畏敬の念によるものなのか、インディアンの目からは涙が流れていた。インディアンは足を上げ両手を上げ、一つのリズムの中にいた。レインボーもインディアンの後に付いた。彼女の踊りは実に微笑ましい。雨に濡れたお下げ髪が馬のしっぽの様に揺れていた。和子は胸の高鳴りを覚えた。和子も後に付いた。やがて、和子の体の奥に仕舞い込まれてたリズムが突然蘇り、そうして三人は一つの輪の中に居た。

ドンドンドン
ドンドンドン
ドンドンドン

太鼓の振動が波のうねりとなり天空の四方に広がっていった。和子は夢中になれた。まるで魂が宙の中に綻びていく様な充実感があった。

ドンドンドン
ドンドンドン
身も心もくたくたになる迄踊り続けた。
ドンドンドン
ドンドンドン

踊り疲れ畳の上に倒れた時、和子は一人になっていた。元に戻った部屋で仰向けになり、和子は天井を眺めた。見慣れた木目を目で追いながら、インディアンが言った『我等の誇り』という言葉を引き寄せてみた。

五

太郎と和子はとある店の前に立っていた。その店は周りの雰囲気とは一線を画していた。太郎は引き戸を引き中に入った。和子も続いた。店内は和子達が小学校の頃に使っていた木の椅子がカウンターの下に並べられ、壁には懐かしい看板やポスターが所狭しと貼られていた。亜鉛板の傘の下で、裸電球がどことなく暖かみのある光を放っていた。

太郎と和子は窓際に席を取った。
「懐かしいなあ……。デコラ板のテーブルじゃないか」
太郎が指先でコツコツとテーブルを叩きながら言った。
「これ、デコラ板って言うの……」
「ああ、熱いやかんを置いても大丈夫。水が溢れてもさっと拭けばいい」
「へえ……。そんな万能テーブルなのにこの頃見かけないよね」
先程よりメニューを眺めていた太郎は『ラムネ』二本と『日の丸弁当』を注文した。
「『日の丸弁当』って、もしかしてあれ……。そんなメニュー本当にあるの……」
和子はまじまじとメニューを眺めた。
「本当にあるんだ……」
和子はきょろきょろと周りを見回した。『昭和の思い出の館』そんな所に二人は居た。間もなくおじさんが注文の品を持って来た。団塊の世代だという事は察しが付く。おじさんは無表情でしかも無言のまま、注文の品々をテーブルの上に置いた。和子はデコラ板のテーブルの上に置かれたアルミの弁当箱の蓋を開けた。白いご飯の中央に確かに梅干しが一個乗っていた。文字通りの『日の丸弁当』が裸電球にライトアップされていた。早速、弁当箱に添えられた二対の割り箸で、両端から白米が銘々の口に運ばれた。中央の一個の梅干しは上下に、また左右に移動しながら徐々に小さくなっていた。
「うまい。こんなに美味しい弁当は初めてだ」
太郎は感慨深げに言った。
それから二人はラムネを飲んだ。
「昔からこのラムネを飲む時は苦労をしたわ。中のガラス玉が飲み口を塞ぐでしょう」
和子がラムネの瓶を傾ける度に、ガラス玉が瓶の中で転がった。
「何してるんだ。瓶の凹んだ所を下にすれば、玉がそこで止まって飲み口を塞がない様になっているじゃないか……」
「へえー。知らなかった。六十年間生きて来て初めて知ったわ」
「常識。知らないのはお前だけ」
「そうですか。私だけですか……。話は変わるけど、考えてみれば私達も随分長く生

きて来たのね。あっという間の出来事だったわ。だけど、その中で何が出来たのかしら……。どう思う？……」
「何も出来てやしないさ」
相変わらず太郎は弁当のご飯粒を拾い集めていた。
「でも、貴方は絵を始めたから、生命が消える事は無いわね」
「お前はどう見ても消えそうにないけど」
「それが、このままだと消えそうなの」
「……」
店を出ると、二人は赤や青のネオンに彩られた街のアスファルトの上を肩を並べて歩いた。暫く歩き橋の所迄来た時、二人は立ち止まり川のせせらぎに耳を傾けた。和子が蹴った石が『ぽちゃん』と何処かで沈む音がした。

六

その夜、和子は夢をみた。鉛色の空気が息苦しい。和子は灰色の砂の上を歩いていた。足の裏で感じる余燼の焼ける様な感触。やがてたまゆらの音色に導かれ川岸迄来た時、和子はふと空を見上げた。水色の光が降っていた。その光は赤や黄色のぼんぼりの様な明かりの玉となり、膨らんだり萎んだりしながら消えていった。そうして、和子は眩いばかりの銀色の光の中にいた。和子は光の中を歩いた。前方より聞き覚えのある声声がざわめきとなって手招きしている。和子は突き進んだ。ざわめきは次第に大きくなりそれと共に明るさも増して来た。此処、昔来た事がある。和子は記憶を手探りながら歩き続けた。
突然、足の裏が冷たい。ふと足元に目をやると、和子はいつの間にかインディアンの皮の靴、モカシンを履いていた。足の裏から伝わった来る恐怖感が鼓動を激しく打ち鳴らす。
ドンドンドン
ドンドンドン
一瞬、すべてが止まった。和子は震える位強く握りしめた掌を思いっきり解き放した。それから深呼吸をして、風を切る様に体を反対に振り向けた。そして、走り出し

た。和子は元来た道を夢中で駆けた。不思議な事にモカシンを履いている足元が妙に軽い。羽を持った鳥の様に軽やかだ。和子は茜色に染まる空の下を駆けていた。駆けても駆けても茜色の空は続いていた。

『カッコウ。カッコウ』

息衝く和子の耳が聞き覚えのあるメロディーを捉えた。恐怖心が少しずつ和らいで行く。メロディーは和子に寄り添う様に付いて来る。遙か前方にアーチ型の入り口が見えて来た。入り口に近づくにつれその向こうに見覚えのある風景が、代赭色に焼けた白黒写真の様な懐かしさでもって広がっているのか分かる。見慣れた家々の屋根・大きな樹木・誰もいない通り・静寂な海。ごく、ありふれた日々を捉えた情景……。

窓の外から小鳥達の囀りが聞こえて来た。和子は勢い良く床から起き上がり、カーテンを引いた。太陽がいた。

七

それから数ヶ月が経ち、和子がいつもの様にネックレスの糸換えをしている時だった。女性が店内に入ってきた。

「元気」

友人の康子だった。

「なんとか元気」

「微妙な言い回しね」

「お客が来たから、お茶にするか。ちょっといいお煎茶をお入れ致します。どうぞお掛け下さい」

「はいはい。じゃあ、失礼して……」

和子は席を立ち、テーブルの隅の茶盆に設けた急須に茶葉を入れた。お湯が注がれると、摘み取られた茶の芽から深い緑の香りが部屋を暖めた。

康子は和子が差しだしたお茶を口に含んで、

「ああ、美味しい」

とさも満足気に言った。

「それは、良かった」

「貴女から入れて貰うお茶も、これが最後かな」
「何を言ってるの。今生の別れみたいな事言って」
「まあ、その事はいいとして。貴女がさっき繋いでいた石、トルコ石でしょう」
「そう」
「トルコ石って、何処で採れるの？」
「トルコ石はイラン・エジプトのシナイ半島・アメリカの南西部・それから中国のチベット」
「中国」
「ええ」
「トルコって名前が付いているのに、トルコでは産出されない。どうして？」
「それは、イラン・エジプトで産出されたものが、トルコの商人によって、トルコを経由してヨーロッパに持ち込んだから」
「そうなんだ」
「トルコ石と人との関わりは古く、古代エジプトの墳墓から発見されたり、インカ・チベット・インディアンなどの民族にも愛好されていたの。特に、アメリカインディアンにとってはお守りであり、特別なものだった。トルコ石は堆積岩なので、結晶構造がないのでゼリーみたいなものなの」
「ゼリー」
「だから水分が抜けると割れてしまう。邪悪なものや危険から身を守ってくれる石と言わるのは割れるから。インディアンが身に付けていて割れると、トルコ石が身代わりになってくれた。トルコ石を持っていたお陰で身体には何事も無かったのだが、代わりにトルコ石が割れていた。そういう伝説があるの」
「そうなんだ」
「天然のものは色が変わるし、酸にも弱い」
「デリケートな石なのね」
「風化していくという点では、人間に近いものを感じてしまうわ」
「成る程。この黒い模様は何？」
「それは、不純物が石の中に入ったもの」
「それぞれが人間と同じで表情が違うのね」

「そうなの」
「そうなの……か」
「何か話があったのでは？」
「うん。実は。中国に行く事にしたの」
「へえ。中国。いいじゃないの。色々見る所有るものね」
「観光じゃないの」
「じゃあ、何なの？」
「学校に行く事にしました。六十歳の目で見たいものがある気がするの」
「六十歳の目……。でも、素敵。貴女、中国語勉強していたものね」
「しかも、単身でね」
「単身？　大丈夫。ご主人は行かないの」
「乗り気じゃないもの。定年退職してから、家にいるわ。念仏の様に言う言葉、『昔は良かった』って」
「成る程。」
「でも、私は行きます。先週のガレージセールで身の回りの物、かなり換金したから。金額にはならなかったけど。身軽になりました」
「貴女も、ポトラッチ、それ何？」
「ポトラッチ、それ何？」
「私も知らなかったの。ポトラッチって、インディアンの儀礼的な祭事で、酋長が部族民や招待した他の酋長に贈り物をする風習の事らしいの。その時、出し惜しみをすれば、地位や権威は著しく失われるから、自分の持っているものを殆ど放出したみたい。それに、招待を受けた側の酋長も、今度はそれ以上に振る舞わなければポトラッチの敗者になるから、競い合って放出したそうよ」
「俺様はケチじゃないぞ、って……」
「でも、それだけじゃないと思うの。ポトラッチが、自己を誇示する為だけの行為とは考えられないの。もともと、インディアンはシャーマンを崇拝する誇り高き人達だから、ポトラッチも威厳を誇示する為に最初は競い合うというレベルのものだったのかも知れないけど、酋長としての『捨て身で立ち向かう』強い思いみたいなものを推し量る尺度だったのでは……。究極の所では、見えない世界に自分の一番いい魂を捧

げたい。そんな、夢のある行為と思ってみたりもするの。だから貴女も貴女流のポトラッチをする事により、今より少し前を目指そうとしているのね」
「そりゃそうよ。荷物一杯持っていて、羽ばたけると思う？」
「解き放たれた時、見えるものがあるのかも知れない」
「ポジティブに考えるなら、そこから一歩が始まる」
「終わりじゃなく、始まりか」
「でも、心の何処かで人生の整理をしているって事ない？　一杯になった部屋の中を後片づけしている様な……。そういう感覚ない？」
「この頃、霞の向こうに朧気ではあるが、何かを感じるの。それが、何なのか」
「考えるよね」
「考えますか……。確か二十歳だったと思う。ボーイフレンドと港を歩いていた時、同い年位の青年に声を掛けられ、その青年の誘いで乗船して、彼の私室にお邪魔した事があったの。その青年は日本語も流暢だったが、他に数カ国語を勉強していた。その時、私はその部屋の円窓から見る夜空を想像したの。キラキラ星が輝いていて無限の希望を感じたわ。若かったものね」
「そうよね。私、若い方にいつも言うの。若いイコール才能。若いイコール可能性。若いイコール素晴らしい。若いって事は、夢を感じるものね」
「じゃあ、おばさんには夢が無いって事？」
「かなり厳しい現実が横たわっている事は確かよ」
「そうね。でも、先程の貴女の話には夢を感じたけど」
「でしょ。ただ、おばさんはしたたかだから、六十年間に付いたものを捨てはしないわ。むしろそれこそが原動力になっているから」
「たくましいイコール凄い」
「それ、何」
　その後、康子がしみじみと言った。
「実は、一ヶ月前に中国に行ったの」
「そうだったの」
「昔、私の祖父が北京の紫禁城の近くで商売をしていたので、一度その場所を……。と言ってももう何十年も前の事だから、街並みもすっかり変わっている事は分かって

いたけれど、でもどうしても見たいと思ったの」
「で、どうだった」
「うん。近代的なビルが建ち並んでいた。私は昔の面影を求めて『胡同』（フートン）迄歩いたわ」
「フートン？」
「そう。網の目の様に広がる細い路地の事なの。そこは、そのフートン（通り）に面して伝統的な住まいが未だ残っているので、昔の人々の息遣いが感じれる所なの」
「へえ……。で、感じた？」
「ええ。フートンの一角に立ち通りを眺めていた時、『柳絮』（リュウジョ）という白い綿の様なものが風に吹かれ舞い降りて来たの。それは凄い数。街も人も皆リュウジョの中に居たわ」
「リュウジョって何？」
「中国では春の訪れを知らせるもので、『楊樹』（ヤンジュ）という柳の樹木から出る種子なの。まるで雪が降って来たかと思う位、フワフワ・フワフワ飛んで来る」
「見てみたい」
「でしょ。後から後から舞い降りて来るリョウジョを眺めながら、リュウジョは激変するこの中国の過去も現在も未来もこんな風に優しく包み込むのだと思った瞬間、私の人生がとてもいとおしく思えて来た」
「そうよね……」

二人の会話が途切れたそんな時だった。『カッコウ。カッコウ』とカッコドリが時計から飛び出し鳴き始めた。二人は鳴き声のする方に耳を傾けた。和子ははっとした。『これだったのか』夢の中で和子が夢中で駆け去ろうとした時、聞こえて来たあのメロディーは。
「何故か、ほっとするわ」
康子はしみじみと言った。
「私もそう感じるわ」
二人は三つ目の『カッコ』が鳴き終わるまで聞き入った。
「この頃インディアンの親子と仲良くなってね」

「インディアン？　此処に来るの？」
「いいえ。私の部屋に。」
「貴女の部屋に？」
「それも、信じて貰えないとは思うけど……。天井からやって来るの」
「天井？　貴女の家、地下にあったっけ」
「やっぱり、止めるわ」
「どうして。私以上に飛んでらっしゃるじゃない。続けて。聞きたいわ」
「先日など、バッファローの群れと一緒に来たわ」
「部屋は広いの？」
「六畳一間だけど」
「そう……」
「その時、私など部屋の隅に追いやられたけど……。でもあんなに沢山のバッファローを見たのは初めて」
「どうりで、先程からインディアンの話をすると思った。ところで、その子、幾つくらい？」
「五・六歳かな。女の子なの。私を見る瞳は、いつも私を何処か遠い所に引き戻している様な気がするの」
「ふうん……」
「そうそう」
「何……」
「思い出したわ」
「今度は何を？　話して……」
「あの日、インディアンは出窓の花瓶に挿していた百合の花を見るなり、（狩を止めてトウモロコシの収穫に行かなければいけない）そんな風に呟いたの。そうしたら」
「そうしたら……」
「そうしたら、大変。部屋の中はバッファローの群れが天井目がけて一斉に走りだしたの。部屋の中は目の前が見えない位に砂煙が立ち、思わず私は両手で目も口も覆ってしまったわ。暫くして、指の間から辺りを見回した時には、皆何処かに消えてしまった後だった」

「消えた……。天井から消えた」
「おそらく」
「でも、互いは言葉が通じるの？」
「いいえ」
「でもどうやって、互いの思いを伝える事ができるの？」
「テレパシー」
「テレパシー？」
「そう。テレパシーは全てを超越するでしょう」
「成る程。それは、凄い」
「でしょ」
「インディアン、か。貴女の話の方が素敵」
「そう。でも、信じる？」
「勿論」
「ところで、いつ発つの？」
「それが、明日なの」
「明日。悪いけど、お見送りは行けそうにないわ」
「此処で十分」
「無理しない様、体には気を付けてね」
「ありがとう。私のテレパシーもキャッチしてね」
「やってみる」
和子は店の出入り口で康子を見送った。康子は通りの方向に歩きながら、一度だけ振り返り、夕暮れ時の人混みの中へ帰って行った。

八

和子は夕方より何となく胸騒ぎがしていた。その日も風の強い夜だった。やはり二人はやって来た。和子は二人の為にお茶の用意もしていた。
（風の強い日だ）
（お見えになる様な気がしていました。今夜はお茶をお入れ致しますので、まずはお

菓子を召し上がって下さい）

和子が準備した座布団に三人は車座になった。和子は真ん中に菓子盆を置き、その中の一つを女の子に手渡した。インディアンも一つを取った。二人はじっと手に持ったまま、初めて見る物体を鼻に近づけ、嗅覚でもってその正体を探るかの様に嗅ぐ仕草を繰り返した。そんな二人の姿を見ていた和子は、盆の中から菓子を取り美味しそうな表情と共に口に運んだ。二人も後に続いた。経験した事の無い甘味に大いに満足している事は、二人の表情から窺えた。和子はそれぞれの湯呑み茶碗にお茶を注いだ。

（お菓子に合うと思います。どうぞ）

インディアンは一口含み、それから残りを一気に飲み干した。

（これは何だ）

（私がいつも飲んでいる日本茶です）

（これを飲んでいるのか？）

（そうです。この飲み物には不思議な力が宿っています）

（不思議な力？）

（はい）

そう言いながら、和子はもう一杯のお茶を用意した。

（目を閉じて下さい。そうして、香りを楽しみながらゆっくり飲んで下さい。サラサラと茶の葉を揺らす緑色の風が吹いているでしょう）

インディアンは言われた通りに目を閉じた。

（ああ、吹いている）

（そうでしょう。いつまでも吹かれていたい……。そんな風に感じませんか？）

インディアンは静かに頷いた。女の子はクスクスと笑いながら両手で茶碗を持ち、こぼさない様に少しずつ口に含んだ。

（今夜は何かお話があるのではありませんか？）

（どうして分かった？）

（お茶の所為かも知れません）

（そうか……）

（話して下さい）

（じゃあ、話そう。今夜は別れを知らせに来た）

（え、別れって）
（私達は遠い所へ行かなければいけない）
（遠い所って……。もともと貴方達は遠い所から来られたじゃありませんか）
（ああ、そうだな）
（でも、どうしてなの）
インディアンは目を閉じ、考え込んだ。暫くしてゆっくり目を開け、目を細めながら微笑んだ。
（貴女はまだ若い）
（若い？　私、若くなど有りません。だって、還暦を迎えましたから。とても若いなどと……。どうして……）
（貴女は貴女の人生をもっと生きなければいけない）
（……）
和子はすっかり取り乱してしまった。ドキドキドキと、和子の心臓は激しく打ち鳴らし、インディアンが目の前から遠のいて小さくなって行くのが分かる。そうして、和子の目に映るインディアンは雨の中にいた。
和子がぼんやりしていると、女の子が和子の手を揺すっている事に気がついた。和子が女の子に目をやると、女の子はポケットから何かを取り出し和子に手渡した。和子はそれを両手で受け取った。掌には小さなトウモロコシが載っていた。女の子の掌サイズの可愛いトウモロコシで、ザクロの様な赤い実がぎっしり付いていた。
（なんて可愛いのだろう……）
和子は部屋の明かりにトウモロコシを翳してみた。

十

月日が過ぎ、いつもの様に出勤した和子は朝の準備に取りかかっていた。そんな時に、社長が和子を呼んだ。
「お茶を持ってきてくれないかね」
「すぐ、ご用意致します」
「あ、君のも持って来なさい」

和子は急ぎ台所より、二人分の湯呑み茶碗をお盆に載せ運んだ。
「お話って何でしょう？」
「まあ、掛けなさい」
そう言いながら、社長は出された緑茶を一口すすった。そして、いつもの歯切れのいい口調でもって話し始めた。
「元気かい」
「はあ？　はい。元気ですが……」
「それは良かった」
「社長。お加減でも悪いのですか？」
「元気だよ」
今日はとりわけ機嫌がいい様に思えた。
「桜が咲いているかい」
「まだですが、うちの庭には梅が咲いています」
「そうかい。菓子でも食べるかい」
「は、はい。頂きますが……。何か探して来ましょうか？」
「いや、いいんだ。此処にあるから」
社長はにっこり笑って、背広のポケットから包みを取り出した。
「昨日、お客の所でお茶を出されたんだが、菓子を食べなかったから貰って来たよ。君も一つ食べないかね」
そう言いながら、社長は二つの内の一つを和子に勧めた。

社長のポケットには想像もしない物が入っていて、いつもパンパンに膨れていた。いつぞやは、ポケットから取り出した朝食の食べ残しのパンをかじり、コーヒーを飲みながら社内でジャズを聴いていた。時には、そのヨレヨレの背広のポケットには中古のカメラが入っていて、そのカメラを眺めたり、分解掃除をしたりする事もあった。以前、「拾ったんだが」と言って、ポケットから取り出した銀杏の葉っぱを渡された事もあった。ポケットにはいろいろな物が入っていて、それは物であって、何故か社長の内面の一部を垣間見る様でもあった。

「頂きます。まあ、素敵。春が来たみたい」
和紙に包まれた菓子には、桃色の桜の花びらが添えられていた。
「桜は好きかね」
「はい。それは皆同じです。南から始まって北迄、日本列島では皆が桜の咲くのを待ちわびていますもの。桜は人それぞれの思いを淡い花びらで優しく包んでくれますでしょう」
和子は和紙を開いた。
「何か大切なお話でもあるのですか？」
「今日は仕事の話ではないのだ」
「何でしょう」
「じゃあ、本題に入るとするか。個人的な事なのだが。私も還暦を迎えてね」
「あ、そうでしたね」
「暫く寺に籠もる事にしようと考えているのだが」
「出家でもされるのですか？」
「そんな大袈裟なものじゃない。一週間余りだが、知人の寺で修行をさせて貰おうと考えているのだが……」
「店はどうされるのですか？」
「そこでだが、店番を頼みたいのだが」
「私で出来る事はご協力致します。社長は休み無く働いて来られましたから……。いいお考えかと思います」
「そう言って貰うと心強いね。まだまだ仕事の上でしなければいけない事が残っているので勿論帰って来るさ。責任もあるからね」
「還暦って再び生まれ変わる。第二の人生のスタートラインに立つという意味でしょう」
「十干十二支の組み合わせが一回りしてもとに戻る事だから、そう言えるかも知れないね。でも私の場合は自営業だから、定年もましては転職もない。生涯現役という事になるだろうなあ……」
「人それぞれですよね……。知り合いのインディアンから言われたんです。貴女はまだ若い。貴女の人生をもっと生きなければいけない、って」

「ふうん。君はインディアンの友達がいるのかい。まあ、意味深長な言葉だなあ。ところで、君も今年還暦だろ……」
「そうですが……。私は……。考えています」
「そうかい。余り無理しない様にな。君の話は時に恐ろしいものがあるから。心臓に悪い話しは控えてほしいよ」
「心得ておきます」
「じゃあ、ちょっと出かけて来る」
「あ、はい。行ってらっしゃいませ」
社長はいつものヨレヨレのコートを引っかけ、出かけて行った。和子は社長を送り出した後、窓際に腰掛け空をぼんやり眺めた。

肌を刺す太陽が瞳を乾かす様に熱い。茫々たる砂浜は海の様に果てしなく広い。地平線の向こうから青い空が砂漠を覆っている。和子はいつの間にか砂漠の中に立っていた。
（此処は何処だろう？）
背後で風が何かを撫でる音がした。和子はゆっくり後ろを振り向いた。なんと其処には見渡す限りのトウモロコシ畑が広がっていた。和子は急ぎトウモロコシ畑に分け入り、トウモロコシを手に取ってみた。ブルー色したトウモロコシがしっかり実を付け、ずしりと重い。その隣のトウモロコシも同様に手に取ってみた。こちらはイエロー。和子はさらに奥に分け入り、一つ一つのトウモロコシを手に取ってみた。ブラック。ホワイト。
「凄い。凄い。トウモロコシにこんなに沢山の色が有るなんて」
和子は感激のあまり悲鳴を上げた。
それぞれのトウモロコシは空を見上げていた。和子も空を見上げた。その時、黒い影が頭上を横切った。見覚えのある姿だ。それは一羽の鷲だった。鷲は大きく旋回しながら和子を見ていた。突然、鷲は和子の方に近づいて来たかと思った瞬間、鷲は和子の肩を掴むと、ぐっと翼を広げターコイズ・ブルーの空向かって羽ばたいた。和子は空を飛んでいた。眼下の風景が見る見る内に小さくなっていくのが分かる。和子は目を閉じた。風の音に紛れて『カッコウ』のメロディーが聞こえて来た。